

平成27年度 入学試験問題
(第1次)

国語

[50 分]

[注 意 事 項]

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 解答は、すべて別の解答用紙に記入して下さい。

世田谷学園中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答の際には、句読点やカギカッコなどの符号も字数にふくむものとします。

戦時中、横浜で、くじら湯（銭湯）を営む虎吉とその孫である真砂代は二人で暮らしている。日々、二人は食べ物に手に入らなくなっていく状況であった。ある日、二人は、虎吉が隠し持っていた石鹼が食べ物と交換できるかどうかを確かめるために郊外の村に行き、一軒の農家を訪れた。

「石鹼一個につき馬鈴薯一個、十個と十個の交換だね」

腕に抱えているのは、かなり小ぶりの馬鈴薯だった。

それでも気前がいいほうなのだろうか。初めての物々交換だから、相場というものがわからない。女性はわかったうえで、小ぶりの馬鈴薯を十個持ってきたのだろうか。なにしろ今回の遠征では、食料を得るということのほか、石鹼の価値をたしかめるという目的がある。石鹼一個に小ぶりの馬鈴薯一個、それが適正なものかどうか、そこをはっきりさせておきたかった。

だが、なんと訊けばいいのだろう。それぐらいが相場ですかと言うのも失礼な気がする。訊いたところで本当のことを言ってくれるかどうかわからない。

女性は真砂代がいつまでも黙っていることに焦れたのか、「なんだ、^①世間知らずのお嬢さんかと思ったら、ずいぶんと^②図々しいもんだねえ」とにらみつけてきた。

「わかったよ、あと甘藷を十個つけるから、それでいいだろう」

真砂代は振り向き、これでいいのかたしかめようとしたが、虎吉はただ^A目を丸くして見返してくるだけだった。そうじゃなくて、と真砂代は首を横に振った。こうなったら虎吉にもこっちに来て、どうするか決めてほしかった。

「あんたねえ、粘ればいくらでも出てくると思ったら大間違いだよ、いやならよそへ行つとくれ」

苛立った声で女性に言われ、^②そのほうがいいのかも思えないと思った。

やはりこの一軒だけで決めようなんて考えは甘かった。真砂代は手にした石鹼をリュックに戻そうと、腰をおろした。と、なにやら^B痛いほどの視線を感じた。顔をあげると、物欲しげな表情で石鹼を見つめる女性と目があつた。

「どうでしょう」

思わず口に出してしまつてから場違いな言葉だと気づいたが、効果はあったらしい。女性は先ほどまでは打って變つて力ない声で、「それに青菜をつけて、小麦粉を一袋、それで充分だろう」と呟いた。

真砂代はあわてて、「はい、ありがとうございます」と頭を下げた。

石鹼十個を渡し、女性が納屋から運んできた芋と野菜をリュックに詰めると、小麦粉の袋は抱えて逃げるようにその場を立ち去った。

虎吉もあとから追ってきて、二人で先ほど腰をおろしていた川原に戻った。リュックの中身を調べてみると、小ぶりの馬鈴薯が十個に大きめの甘藷が十個、ほうれん草が二束に小松菜が一束、それに葱が一束入っていた。虎吉と二人でうどんやすいとんが何杯か食べられそうな、小麦粉の入った袋もある。

「おまえ、すげえな。これだけありゃあ、しばらくは大丈夫じゃねえか。おれのほうの石鹼は交換しないで持つて帰ったほうがいいかもしれねえな」

頷いてはみたものの、^X真砂代は頭がぼうつとしてなにも考えられなかった。

そろそろ保土ヶ谷橋に着くかというところで、向こうから幼い子供を三人連れた母親らしき人が歩いてきた。子供たちは兄弟なのだろうが、みな痩せて同じぐらいの背丈で、歳の順がわからなかった。女性は真砂代のリュックから飛び出した葱の先をめざとく見つけると、子供たちを引っぱって近づいてきた。

「なにと交換してもらったんですか、もつと先まで行かないとだめですか」

挨拶の言葉もなく、不躰ふしつといえは不躰だが、削げた頬ほと 1 詰まった様子で、礼儀を忘れるのも無理からぬことと思えた。

「おたくはなにと交換してもらうつもりなんだい」

虎吉が訊くと、背中に掛けていたズダ袋から、淡い桃色の着物を取り出した。

「私が娘時代に着ていたものなんです」

きつと何度も着たのだろう、白い裏地には黄色い汗染みが散っていた。よく見ると表地も色褪せたところがあり、均一の色をしていない。

「さつき通りかかった家で見てもらったんですが、これじゃあ引き取り料をもらいたいほどだと言われました。でも、もとはいい着物なんですよ。たしかに古びてこのままじゃ着られませんが、仕立て直せば小さな子供が着られるぐらいにはなるはずなんです」

本気で言っているのだろうかと思砂代は女性の顔を見た。着物の仕立ては得意ではないと思砂代が見ても、色褪せたところや擦れたところを切り捨てたら、子供の着物を作るほどの生地は残らないとすぐにわかった。

③ いつまでも黙って着物を見ている真砂代の横から、虎吉が手を出した。

「たしかにいい着物だ。ちょうどよかったよ。じつはもうじき曾孫ひまが生まれるんでね、いい着物の生地がないかと探していたところだったんだ」

虎吉はリュックをおろすと、大きめの甘藷を選んで四個取り出した。

「あの」と女性の目は甘藷に釘付けになりながらも、手は左右に振られた。やはり着物にそれほどの価値がないことはわかっているらしい。

「これだけじゃねえよ」

虎吉は女性の手に甘藷を握らせると、もう一度リュックのなかへ手を入れ、石鹼を五個差し出した。

「今夜はその芋を食べて我慢してな、明日になったら、これをなにかと交換してもらえばいいや」
女性にさらに渡す。

「あの、こんなには」

④ 言いかけた女性は唇が震え、先がつづけられずにいた。

「いいって、いいって、ちょうどよかった。いい着物が手に入って、こっちもううれしいよ」

着物を受けとった ⑤ 虎吉は逃げるように足早に歩きだした。真砂代が急いであとを追うと、「生まれてくる千鶴子の子供にちょうどいいよなあ」と言った。

路面電車に乗ってもまだ虎吉は、「こんなこともうしねえよ、今日だけだ。運がよすぎるときはこうやってほかの人にも分けねえと、せっかくついた運が落ちてしまうからな」などと言っていた。

真砂代が手に入れた甘藷と、大切な石鹼を他人に与えてしまったことがよほど後ろめたいのだろう。十個あった石鹼を五

個しか渡さなかったのも、出し惜しみをしたのではなく、真砂代への遠慮があったために違いはない。

真砂代は流れていく外の景色を眺めながら、虎吉のやったことについて考えた。

この時節、ああいう腹を空かせた親子は日本中に「ごまん」といえるはずだ。そのうちの一組を助けたぐらいでは「2」といったところだし、あの親子にしても、芋四個と石鱈五個ぐらいでは、数日しか保たないだろう。虎吉のしたことなど、無に等しい愚かな行為だったのかもしれない。それでも、困っている人を見たら助けたくなくなるというのは人間らしさそのものという気がするし、「口は悪いが面倒見のいい、くじら湯のおやじさん」が、こんな時代になっても変わらずにいてくれることがうれしかった。もし虎吉があ的女性を冷たくあしらっていたら、この先、真砂代は虎吉がどういう人なのかわからなくなり、まともに口がきけなくなっていただろう。

そこまで考えたところでようやく落ち着いたが、虎吉にんと言えはいいのかわからなかった。まさか、愚かだけど人間らしい行為だから好感が持てた、などと偉そうに語るわけにはいかない。どうしよう、と虎吉を見たら目があつた。

「今日はいろいろあつたね」

虎吉は眉を吊りあげたが、ふっと息を抜き、「そうだな、いろいろありすぎて、なんだか不思議な日だったな」と微笑んだ。

③ 馬鈴薯……じゃがいも

甘藷……さつまいも

保土ヶ谷……横浜の地名

千鶴子……真砂代の姉

（芥木香津『踏んでもいい女』——一部省略——による）

問一 ——線A、Cの表現にこめられている心情として適当なものを、次のア、イ、ウの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 未練 イ 執着 ウ 怒り エ 悲しみ オ 驚き

問二 1 に入る二字の熟語として適当なものを次の漢字を組み合わせで答えなさい。

破 話 鳥 馬 合 羽 世 耳 切 節

問三 2 に入る、「石」の字を用いたことわざを記しなさい。

問四 ——線①「世間知らずのお嬢さん」とありますが、どのような人のことですか。その説明として適当なものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ものの価値を知らずに、相手の言いなりで交換してしまうような人のこと。
イ ものの価値を知っている、相手の言いなりで交換してしまうような人のこと。
ウ ものの価値にこだわらず、相手に同情して交換してしまうような人のこと。
エ ものの価値ではなく、相手の立場を考えて交換してあげよう人のこと。
オ ものの価値を知らずに、価値以上のものを常に要求するよう人のこと。

問五 — 線②「そのほうがいいのかもしれないと思った」とありますが、真砂代がどのように思ったのはなぜですか。その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 石鹼の価値が分かったため、これ以上、食料を出せそうにないこの家に留まることは無意味に感じたから。
- イ 石鹼の価値が大したことがないと分かってしまったため、この家で粘ることは時間の無駄に感じたから。
- ウ 石鹼の価値がどれくらいなのか確かめる方法がないため、別の家でその価値の妥当性を確かめようと考えたから。
- エ 石鹼の価値の思案中に農家の女性が突然怒り出したため、身の危険を感じ、石鹼を強奪されることを怖れたから。
- オ 石鹼の価値を確かめたいと思っただけなのに、農家の女性に欲張りな人間と扱われたため、腹が立ったから。

問六 — 線③「いつまでも黙って着物を見ている真砂代」とありますが、そのときの真砂代の心情はどのようなのですか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分にはその価値が分からない着物を、食べ物を欲しいがために嘘を並べ続けている母親のずるがしこさにすっかり嫌気が差して一刻も早くその場から立ち去りたいと感じている。
- イ どう見ても価値があると思えない着物なのに、食べ物を得るため、着物の良さを必死に説明しようとする母親にどのように声をかけていいのか分からずに困惑している。
- ウ 自分たちには必要があるとは思えないはずなのに、いつまでも着物の価値をしゃべり続ける母親にこちらには関係がないということを理解してもらいたいと感じている。
- エ 誰が見てもほとんど価値のない着物を、子供を育てるために、価値があるかのように訴える母親の必死さは分かるが、自分にはどうすることもできないことへの憤りを感じている。

オ いくら子供に食べ物を与えたいからといって、価値のない着物に価値があると偽り、自分たちを騙そうとしている母親の悪意にうんざりとし、軽蔑している。

問七 — 線④「言いかけた女性は唇が震え、先がつづけられずにいた」とありますが、女性の言いかけた「言葉」の続きを次のように記しました。□に入る適当な二字の漢字を記しなさい。

・あの、こんなには：□にしていたくわけにはいきません。

問八 — 線⑤「虎吉は逃げるように足早に歩きだした」とありますが、虎吉がそうしたのはなぜですか。その理由として適当なものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 女性から感謝されることが照れ臭くて仕方なかったため。
- イ 礼儀知らずの親子にこれ以上関わり合うのを回避するため。
- ウ 女性からもっと食料をよこせと要求されるのを恐れたため。
- エ ひ孫のために一刻も早く着物を仕立ててあげたかったため。
- オ 女性が遠慮して、渡したものを返そうとするのを防ぐため。
- カ 女性の気が変わらないうちに、着物を手に入れたかったため。

問九 〓線X「真砂代は頭がぼうつとしてなにも考えられなかった」とありますが、その理由を「衝撃」と「解放」という二つの言葉を用いて、五十文字以内で記しなさい。

問十 〓線Y「微笑んだ」とありますが、虎吉が微笑んだ理由を、解答欄の文末、「ことが分かったから。」につながるように八十文字以内で記しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答の際には、句読点やカギカッコなどの符号も字数にふくむものとしします。

ひとは意味にこだわりつつ生きる。そのことで他の生き物にはない文化というものを生みだしてきた。けれども、意味の組織を編むというのは、じつは意味になりえた別の何かを隠すというかたちでしかなされない。意味というフィルターでスクリーニングするのだから、網に引かからないものは存在しないことになるという意味でだけではない。意味を編むということは、編まれた意味の秩序にとつてあつては困るような欲望を「無意識」へと抑え込んでおくということでもある。だから、夢がしばしばそうであるように、本人にとつて重大な意味をもつ「あらぬ」欲望を隠すために、どうでもいいようなことを前面に出す。ひとにとつてほんとうにのびきらない欲望は、ときとして自分がしたいと思つていることがらの脇か背後にあるものなのである。〈わたし〉をほんとうに編んでいるものをわたしたちはまだ知らない。

幼子から青いひとまで、共通しているのは、ことがらには一つしか真理がないこと、そしてその真理はいまあきらかに「われ」の側にあるという確信だろう。

納得はゆかないが受け容れざるをえない、理不尽でもそうするよりほかない……。そんな思いを洩々ため込んでゆくうち、ひとは、①「理解」にもいろいろなかたちがあることに気づくようになる。言葉で言えば、分かる、解る、判る、思い知る、承服する、納得するといったかたち。

これらをいま一つずつ正確に定義しなおすことはできないが、②「理解」のこうした多様な位相を、〈問い〉と〈答え〉の多様な対応関係として描きなおすことはできる。

「正解」はふつう、一個しかないと考えられている。だから、答えが出ないといらいらする。

A

解がある場合がある。こう考えても解けるし、ああ考えても解ける、そんな問いである。 B 「光は粒子でもあるし波

動でもある両義的な存在だ」という説。しかし、^{II} 対立する二つの解がともに主張しきれないという例もある。「世界に果てがあるか」という問いは、あると考えても、ないと考えても首尾一貫した説明がつかない。物理学にはこの種の問題が多い。「世界は何のために存在するのか?」「世界に始めと終わりはあるのか?」などという哲学的な問いともなれば、そもそも人間には根拠のある答えは出せない。

もっと身近な問題ならそれほどやこしくないかというところ、 C 逆である。生きてゆくうえでほんとうに大事なことは、たいてい答えがない。たとえば「わたし」とはだれかということ、ひとを翻弄する愛と憎しみの理由、そして生きることの意味。これらの問いは、答えではなくて、問うことそれじたいのうちに問いの意味のほとんどがある。^③ これらの問いとは一生、ああでもないこうでもないで格闘するしかない。問いつづけることが答えることだと言ってもいいくらいだ。しかも、これらの問いへのかわり方は、時とともに変わりもする。若い頃に、もし答えが出なければ生きてゆけないとまで思いつめていた問題が、歳を重ねるとともに褪せて見えてくることもある。理解は時間とともに進行してゆくものだから、あのときはわからなかったけれどいまだたらわかったということも生じる。あるいは逆に、何かが見えてしまうと、それが他に波及していつて、いままで ^{III} 自明だと思っていたことのすべてが問いの対象へと裏返ってしまうこともある。ありとあらゆるものを一から問いなおさなければならなくなり、そうして世界を見る眼それじたいが変わってゆく。そのあいだにはもちろん激しい抗いもある。だから、理解はジグザグに進んでゆくほかない。そしてそのうち、すばつと割り切れる論理ではなく、噛んでも噛み切れない論理のほうに真実に近いといった感覚が、^④ 知らぬまに身になじみだす……。けれどももっと大事なものは、わからないけれども、わかつていないということだけはわかつていないことではないだろう。 D 、わかつたつもりになっているが、まだわかつていないことがあるとわかるということ。問題にいつそう

近づくとほそういうことだ。もっと言えば、生きるうえでほんとうに大事なことは、わからないものに囲まれたときに、答えがないままそれにどう正確に処するかというものだろう。他国との政治上の駆け引き、地域社会でのめんど、介護をめぐる家族のなかの諍い、子育てをめぐる迷いやためらいといったものが、そういう正解のない問題の典型例だ。

若いあいだは、わからないものをなんとしてもわかつたとする。わからないまま放置していることに耐えられない。だから、^⑤ わかりやすい物語にすぐに飛びつく。若いひとたちは（などとえらそうなことは言えないのだが）、思いどおりにならないもの、思いどおりにならない理由がわからないものに取り囲まれて、苛立ちや焦り、不満や違和感で息が詰まりそうになっている。だから、その鬱ぎを突破するために、自分が置かれている状況をわかりやすい論理にくるんでしまおうとする。その論理に立てこもろうとする。

一例だけ挙げてみる。身体を傷つけたり、身体を商品にするような若者の風俗をめぐってマスコミが騒ぎだしたときに、多くの若者は「この身体はわたしのものだ。だから、それをどうしようとわたしの勝手である」というロジックのうちに立てこもった。「大人」たちはそれを居直りと受けとったが、このロジック、じつは「大人の社会」そのもののロジックだった。土地について、財産について、家庭内のことについて、はては自分の子どもについても、「大人」たちは「これはわたしの所有物である。だから、それをどう取り扱おうと、どう処分しようと、わたしの自由である」と、あたりまえのように主張してきた。このロジックを若いひとたちはただ正確にコピーしたにすぎない。が、かれらにほんとうに必要なだったのは、自分たちが皮膚で感じていることを、「大人」のそれとは別の、きちんとした論理に仕上げることであったはずだ。抵抗というのは、そうしてはじめてたしかなかたちをとりうる。

③ フィルター……特定の成分や光などを取り除くもの。
④ ⑤ 鷗田清一『わかりやすいはわかりにくい?——臨床哲学講座——』——一部改変——による。

スクリーニング……物事をおおいかくして見えなくすること。
マスコミ……新聞やテレビなど、大衆に大量の情報を伝達するもの。
ロジック……論理。論法。

問一

A に入る言葉として適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ たとえば ウ けれども エ むしろ オ あるいは

問二

——線Ⅰ～Ⅲの語の意味の説明として適当なものをそれぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「のつぴきならない」

ア とるにたりないこと

イ 認識することができないこと

ウ さけることのできないこと

エ かけがえのないこと

オ かなえることのできないこと

Ⅱ「対立する」

ア 相いれないこと

イ 組になっていること

ウ 敵対関係にあること

エ 似ていないこと

オ 向かい合っていること

Ⅲ「自明」

ア すでに証明されていること

イ もとからそうであること

ウ 万人に受け入れられること

エ 自然とそうなったこと

オ わかりきっていること

問三 ― 線①「『理解』にもいろいろなかたちがあることに気づくようになる。言葉で言えば、分かる、解る、判る、思い知る、承服する、納得するといったかたち」とありますが、この中のA「思い知る」・B「承服する」はどのような理解のかたちだと考えられますか。適当なものをそれぞれ次のA～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 新たに見つけ出すこと
- イ 身にしみて感じる事
- ウ 直感的に認識すること
- エ 納得して飲みこむこと
- オ 経験から導き出すこと
- カ 論理的にとらえること

問四 ― 線②「『理解』のこうした多様な位相を、〈問い〉と〈答え〉の多様な対応関係として描きなおす」とありますが、どういうことですか。その説明として適当なものを次のA～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 場面の違いによっておこる「理解」の速さの違いを〈問い〉と〈答え〉の手続きの量の差だと考えること。
- イ 場面の違いによっておこる「理解」の正確さの違いを〈問い〉と〈答え〉の複数ある結びつきの差だと考えること。
- ウ 場面の違いによっておこる「理解」の仕方の違いを〈問い〉と〈答え〉の絶対性の証明だと考えること。
- エ 場面の違いによっておこる「理解」の深さの違いを〈問い〉と〈答え〉の正当性の指標だと考えること。
- オ 場面の違いによっておこる「理解」の形式の違いを〈問い〉と〈答え〉の様々なあり方の現れだと考えること。

問五 ― 線③「これらの問い」とありますが、それとほぼ同じ意味の表現を本文中より二十字以内で探し、最初と最後の三字をそれぞれぬき出して、答えなさい。

問六 ― 線④「知らぬまに身になじみだす……」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを次のA～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 問いに取り組む過程において、世界の見かたの変化によって発想の転換が訪れ、問いの範囲や理解度が変化していき、問いの重要性が低下するから。
- イ 問いに取り組む過程において、問いの重要性が変化し、理解の進行や問いの更に奥にある問題に気付くようになり、世界に対して懐疑的になるから。
- ウ 問いに取り組む過程において、理解が進行することによって問題の重要性が低下していき、別の問いに目が向くようになるにつれて考えかたが変化するから。
- エ 問いに取り組む過程において、問いの重要性が変化し、理解の進行や問いの範囲の拡大によって視点の変化が生じ、答えを何度も問い直す必要があるから。
- オ 問いに取り組む過程において、問いの理解が進行することによって問いの新鮮さが失われ、新たな問題に取り組むことで自己の思考が洗練されていくから。

問七 ―線⑤「わかりやすい物語にすぐに飛びつく」とありますが、どういふことですか。五十字以内で説明しなさい。

問八 ―線「ひとは意味にこだわりつつ生きる」とありますが、筆者は問いと答えの関係をどのようなものとしてとらえ、そのうえでどのようなありかたで意味にこだわるべきであると主張するのでしょうか。本文をもとに次の文の空欄を埋める形で自分で考えて答えなさい。なお、

は十字以内、

は四十字以内で答えること。

問いと答えとの関係や問いへの向き合い方は必ずしも

 ため、

 べきである。

問九 この本文についての説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一般論として若年層の人々の考え方を提示し、それを否定する形で筆者の主張が展開されている。
- イ まず具体例を提示し、そこに見出される問題点を分析し、それに対する解決策が導き出されている。
- ウ 筆者の主張が読者に分かりやすくなるように、文末が迷いを感じさせない断定表現に統一されている。
- エ 文章の先頭に問題提起の文を置くことによって、読者が文章の主題を理解しやすいように工夫されている。
- オ 自ら設定した問いに答えるという形式を繰り返しながら論を進めることで、筆者の主張が明らかにされている。

三

次の①～⑩の ―線部の片仮名を漢字に直しなさい。漢字はバランスを整えて、ていねいに記すこと。

- ① 草花を鉢から庭にイシヨクした。
- ② 新進小説家が新作の小説をアラワす。
- ③ 今年はサンマがホウリヨウだそうだ。
- ④ 飛行機をソウジュウする。
- ⑤ 持っている力を十分にハッキする。
- ⑥ 裁判で身のケツパクを証明する。
- ⑦ オゴソかな雰囲気^{かんいき}で儀式をとり行う。
- ⑧ 自分勝手な行いにヒナンの目が向けられる。
- ⑨ エイヨウカの高い食品を摂取^{せつしゆ}する。
- ⑩ 工業製品はキンシツであるべきだ。

受 験 番 号

氏 名

得 点

点

一

問一 A

B

C

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

ことが分かったから。

二

問一 A

B

C

D

問二 I

II

III

問三 A 「思い知る」

B 「承服する」

問四

問五

問六

問七

A

問八 B

問九

⑥	①
⑦	②
かな	す
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤